

# 文芸サロン作品集

2021年10月

シニアネット福岡 (SNF)

文芸愛好会

短歌

宮 由枝 作

里いもの太葉に残る雨露を　こぼさぬほどの　秋のかぜ立つ

夜這ひし　あはれなめくぢ　銀色の筋ながながと　朝日にさらす

ゆらゆらと　山の端そめて沈む日の　暑さひと日の終わりに朱く

俳句

紹介者 宮 由枝

ふと思ふことありて蟻ひき返す　　〈橋 間石 作〉

はじめから声からしたる蛙哉　　〈黒柳 召波 作〉

(2021年10月)

川柳

榊 拓司

久しぶり、秋の青空、遠のくコロナ

風鈴も、秋風なびいて、そろり休憩

大雨に流され、苦勞の甲斐なし、秋野菜

秋真つ盛り、いつまでも、真夏の太陽引き連れて

Tシャツ離せず、おしゃれかなわぬ、令和の神無月

この夏に、肌で感じた異常、遠のく日本の四季

緊迫の二年、世界が震えた、コロナ反乱

慣れとマンネリ、克服できるか、第六波

やっただね、居酒屋での、酒と笑い

温暖化と水害、待ったなし、海に向こうの石炭発電

炭酸ガス垂れ流し、昼はスモッグ、夜は停電

新総裁決まり、先生たち出番、いざ出陣

始まれば、練った政策より、名前の連呼

握手できず、作戦立たず、つい握手

不文律は美しい

山本 為三

オリンピックは終わった。柔道で金メダルを取った大野将平という選手がいた。金メダルを獲得した時のシーンが印象的だったという話がある。多くの選手が喜びを爆発させる中で、大野は静かに喜びをかみしめていたという。敗者の目の前で喜びを見せるのは相手にさらに苦しみを与える、彼の哲学だといふのである。

古い話、1980年、日本のプロ野球、近鉄にベンジャミン・オグリビーという外人選手がいた。アメリカで本塁打王の記録を持つ選手である。峠は過ぎていたがそのインパクトの強さはボールがつぶれそうだといわれた。対ロツテ戦で牛島からサヨナラホームランを打った。いつも寡黙にベースを回るのに三塁あたりでガツポーズをした。がすぐにやめて神妙な顔つきになった。ガツポーズは投手への侮辱になることに気づいたらしい。「思わず興奮してしまった。牛島に謝りたい」と後悔した。

当時、アメリカではホームランを打った後、投手を侮辱するような態度をとってはいけないという暗黙の了解があった。メジャーの不文律として

- ・ 大量リードの時に、盗塁、送りバントをしない。
- ・ ノーヒットノーラン阻止のためにバントヒットを試みてはいけない。
- ・ 大量リード場面で、0-3から打ってはいけない。
- ・ 乱闘を傍観してはいけない。

2001年、アメリカに渡った日本選手が0-3から強打した。翌日、報復とみられるビーンボールで死球を受けた。

長島、王のご二人はホームランでベースを回るのは早かつたらしい。投手にとつてつらい時間を短くしてやる。ガツポーズをしていると時間が長くなる。

勝負の世界に生きる者同士の気配り。その光景はさわやかで美しい。

私は無趣味。これは大変困ることである。例えば、質問形式の自己紹介、順番が回ってきて、趣味は何ですかとえらく気軽に尋ねられたりする。読書とか、旅行とかと、ありきたりの答えをして、お茶を濁す。再質問がないのでこれでいいたい逃げ切れる。ところが雑談、おしゃべりレベルの場で趣味は何ですかと真正面から聞かれるとうろたえる。無趣味だから。趣味はないんですよと答える。正直に答える。相手はたぶん失望するか、味気のない奴だなあとあきらめ顔になるのがわかる。その場の雰囲気は壊れる。一瞬、沈黙。相手が器用な人なら話題転換してくれて、まるで何もなかったように場の雰囲気は立ち直る。

自分がやっている旅行や読書は趣味の範囲には入らない。浅くて通り一遍、さらっと読んで、さらっと旅をする。こんな人様に私の趣味だというのは恥ずかしい。要するに底が浅いのである。自分で趣味と言う以上多少は深みがなくてはならない。人を感動させる何かがなくてはならない。まあ、2、30分しゃべれるくらいの中身が欲しい。

趣味を窮屈に考えすぎかなあ、自縄自縛ですね。もう少しゆっくり、おおよう5に、おおざっぱに行きませんか。

趣味の話といえば、音楽、絵画、囲碁将棋、魚釣りが全くダメです。酒は敬遠気味。

楽器はハーモニカを口にはさんだことがある程度。絵画は義務教育で終わり。将棋は並べることができる。囲碁はさわったことがない。魚釣りは朝が早いので最初からボツ。そして酒、喧騒と小汚い居酒屋が苦手。全くの下戸ではないにしてもコップ一杯のビールで飲んだ気になる。うまいとは思わないし味がわからない。

君は一体若い時分何をして時間をつぶしていたのか、若い時に限らず目下の老後も。人によつては非難と軽蔑気味の口調で追及してくる。その都度、エヘラエヘラとごまかし笑いで緊急避難する。

思えば遠くに来たもんだという歌があるが、思えばこのていたらくでえらく貧しい人生になったもんだとしきりと嘆いている。損得で言えば大分損をしている疑いがある。囲碁将棋で向上心と達成感を味わう、居酒屋で親交を深める。楽器を弾いて忘我の境地に浸る。趣味人は豊かな人生を送っているらしい。

援軍がいた。ある人生相談。聞かれれば趣味は読書と答えますが好きな作家など語れるレベルではありません。趣味のある人うらやましい。この相談の回答。私も没趣味の人間。英語でホビー、向上心を持ち、一人で長期間打ち込む活動というようですがこの回答者は面倒くさいと突き放す。そのうえで趣味は語らない方がよい。得意げに講釈を聞かされるには辟易する。趣味を語るのは悪趣味な行為。いささか過激派の回答者。大いに参考にさせていただきます。

## 反射神経

山本 為三

バス停にいた。バスが来た。行き先が違うので見送り。ラッシュアワー。そのとき、女性が駆け足でバスに突進。つまずいて転倒。ハンドバッグが転がった。10メートル先の出来事。女性が転んだのをしっかり目撃した。

ところがである。私の隣にいた女性が転んだ女性のところに素早くかけつけ、腕を抱えて起こしてやり、ハンドバッグを拾ってやり、何かを語りかけている。すごい場面を見た。親切というよりああいう行動をとれる人がいるのに驚いている。あんなに見事にとっさの行動をとれる人がいる。そのごく近くで、ただ茫然とその様子を見ている男。当方、しっかり目撃したのは結構であります。助けに行かなかった。なんで。いやあ女性だから逡巡したのかな。もし小さな男の子だったら？ 駆けつけた？ 自分の中に何か複雑な後味の悪さが残る。

いやそんなことより、あの隣に居た女性のとっさの行動、これは一体何なのか。あの反射神経。瞬発力。瞬発力というよりこれは反射神経のなせる業。加えて瞬間の判断。

電車・バスでお年寄りに席を譲る話。スマホで下を向いて無視する、眠っているふりをする。わかっているがもともと譲る気がない。事情はいろいろでしょうが譲るタイミングを逸したというケースもある。この種の善行はタイミングを逃すと後始末がむづかしい。そこに登場するのが反射神経。お年寄りが視野に入ったら瞬間立ち上がる、これを脳に命じる。迷いなく脳に命じる。

あの女性は日ごろからこの訓練がなされているのでしょうか。それともそのやさしいお人柄が根本にあるのでしょうか。全くうらやましい。恥じ入っております。

「本日は、新型コロナウイルスが蔓延している中、妻のために、ご会葬頂きまして、有り難うございました。」と喪主の挨拶が始まった。

喪主は、近所で育った竹馬の友であり、同級生であり、更に従兄弟である。

三十分ほどかかる小学校に一緒に通ったり、野山を探検したりした仲である。低学年のころまで、少し吃音癖のある彼は気にすることもなく、すばしこかった。かけっこは小学校を卒業するまで、とうとう彼に勝つことがなかった。

農家の四人兄弟の長男で、糸島農業高校に通ったが、家を継ぐことはせずに福岡大学に進み、卒業後不動産と金融の勉強を重ねて、同じ校区の四歳下の女性と結婚し、宗像郡の東郷に店を開いた。

年に数回「武つちゃん！ どげんしような！」と、電話を掛けてきたり、訪ねてきたりしていた。

こちらから出向いた時は、ニュージールランドに行ったり、東北の温泉地に旅したりしたことを、応接間に置かれた夫婦の写真を見せながら二人で楽しげに話してくれた。旦那を常にたてた奥さんの口ぶりに、目をほころばせたものである。

二年ほど前、彼の糸島弁を聞く機会が、なんとなく少なくなってきたように思っただけで電話を掛けたら、奥さんが筋肉がだんだん衰える難病にかかって、介抱している、と静かな口調が返ってきた。

昨年の中学校の喜寿同窓会の折りは、一次会の宴会に参加しただけで、酒も飲まずに車で早々に帰った。また奥さんの病状が悪化したなあ、と感じていた。その後の親戚の葬儀で出会った時に病状を聞いても、芳しい言葉は貰えなかった。

「五年前に発病し、だんだん歩けなくなり、車椅子での生活の後、寝たきりになっていきました」

車椅子は、殆ど彼が押したそうだが。寝たきりになると、自宅で療養したいという本人の希望に添って、宮崎市在住の長男の嫁や東京と横浜に嫁いだ娘達が、交互に帰郷し介護を手伝ったという。

我が家に、こんなことが起こったら……果たして……と、ぞつとした。

コロナ蔓延下のため、身近な近親者と町内会役員や神社総代達だけの少人数の葬儀で寂しさが漂ったが、家族の絆の強さに感動し、目が潤んだ。

最後に彼は吃音もなく、心静かに自信を持って言い切った。

「子供達も良くやってくれました。皆で介抱しました。悔いはありません」と。